「作品鑑賞の鍵」

本展キュレーターの池田佳穂が執筆した鑑賞する際の「手がかり」です。

■ 黒川岳

黒川さんは環境と身体の関係性を捉えようとする試みのなかで、実際に自らの身体をつかって有機的な要素（音、水、風など）に触れ、そのときに出会った感覚を出発点に作品を制作します。

本展では、一見「非常に良く整備された都市空間」に見えるBUG周辺で、都市空間における自然の循環を、「地・水・火（陽）・風」の4つの視座から五感を用いて探りました。各パフォーマンスから生まれた作品群は、BUGの展示スペース内外に点在しています。ぜひ展示室を都市に見立て、探索するように作品を見つけてみてください。

■ 中田愛美里

中田さんは、空洞を持つ陶器に役を演じる人間たちを重ね合わせ、陶器作品を用いて物語を紡ぐように映像作品を制作。制作の過程で、中田さんは土のかげらに想像を膨らませ、その想像を信じながら陶器を制作し、それに役を与えることで、親密な世界観を構築します。

《かみさまのかげら》では、この親密な世界観と、個人と陶器との私的な関係性を「箱庭」として表現しています。表層に現れていないだけで、私たちも中田さんのように、モノ、言葉、経験など、何かを信じながら、絶えず変化する都市の中で、自分だけの箱庭を作り上げているのかもしれない。

■ 宇田川直寛

宇田川さんは主に写真作品を制作していますが、本展ではセラミックを組み合わせた新作《明日の^{パン}力》を展開しています。陶器のモチーフはパンと皿。宇田川さんが朝食で用意する食パンには、子供から切り方など様々なオーダーがあり、何度もやり直しをしながら、子供に配慮して先回りを試みるという、毎朝の食卓で繰り返される「バトル」の記憶を基に制作されました。都市に張り巡らされた法の概念は、家庭にも通じるものがあるように感じられます。家庭にあるかもしれない「法的な“もの”」について、作品を通じて考えてみませんか。

■ ちえんしげ

ちえんしげさんは、絵画表現と記述表現の配置方法や両者の関係性について、様々な探求を続けながら制作しています。記述された文字の線は、時に言語的な意味を持つ塊として、また時に形や記号のような抽象的な存在にも見えます。

本展では都市風景に点在する平面「ピラ」に着目。踏みじられたピラは垂直から水平へと位置を変え、圧縮された情報が踏みつけられることで意味を失い、行き交う人々の足で物質的に形が変容します。剥がれかけたピラは「大事なもの」と「ゴミ」の狭間にある存在で、つい放置してしまう人々の無意識な心理を表しているように思えます。40点以上の作品群には、ピラ以外にも複数のモチーフが組み合わさっています。ぜひお楽しみください。

■ 平松可南子

平松さんは、境界線が曖昧な現象、生物、自然などの対象を、あらゆる角度から見つめ、それぞれの対象の関係性に思いを巡らせながら制作しています。

本展では、都市に生息する生物や、噴水や駅もれといった水にまつわる現象をモチーフにした立体的な絵画群を展開しています。立体的な支持体に描くことで、絵画の持つ「正面性」からの解放を促し、さらに会場に設置されたスロープ上下の空間を活用することで、都市における複層的な水の循環や、生物や光景の不確かな輪郭を表現しようと試んでいます。展示空間に多声的に存在する作品群（風景）を楽しむ中で、私たちが生活する都市風景の「正面性」について改めて考え直しても良いかもしれません。

■ 時吉あきな

時吉さんは、撮影した対象の写真を紙に出力し、立体コラージュとして再現する作品を制作しています。平面の写真を強制的に立体にすることで、不自然な歪みや独特の表情が生まれるのが特徴です。

本展では新作の立体作品に加えて、それらを再構成して撮影した平面作品を、展示室の重力、質量、遠近感を歪めた展示室内に配置し、全体を「亜空間」として演出しています。中に入ると窓の外からは想像し得ない空間が広がり、私たちが暮らす都市の中にも亜空間が潜んでいるのではないかというユニークな想像を掻き立てます。

■ トモトシ

トモトシさんは、都市空間や公共のルールをアクションによって変化させ、「都市との関わり方」や「人の動きが変容する瞬間」を制作の起点としています。

本展では、管理が行き届いた東京の路上では難しい「着替え」に着目。既存のサービスやシステムを活用し、移動しながらの着替えに挑戦しています。会場では人々が行き交う中で撮影された記録映像も展示され、都市の狭間や、公共と私的空間のグラデーションについて思考を促す機会となるかもしれません。さらに展示室自体も公共／私的な空間を行き来するような仕様が施され、奥に進むほど私的な雰囲気が増すように感じます。その先にある空間もご体験ください。